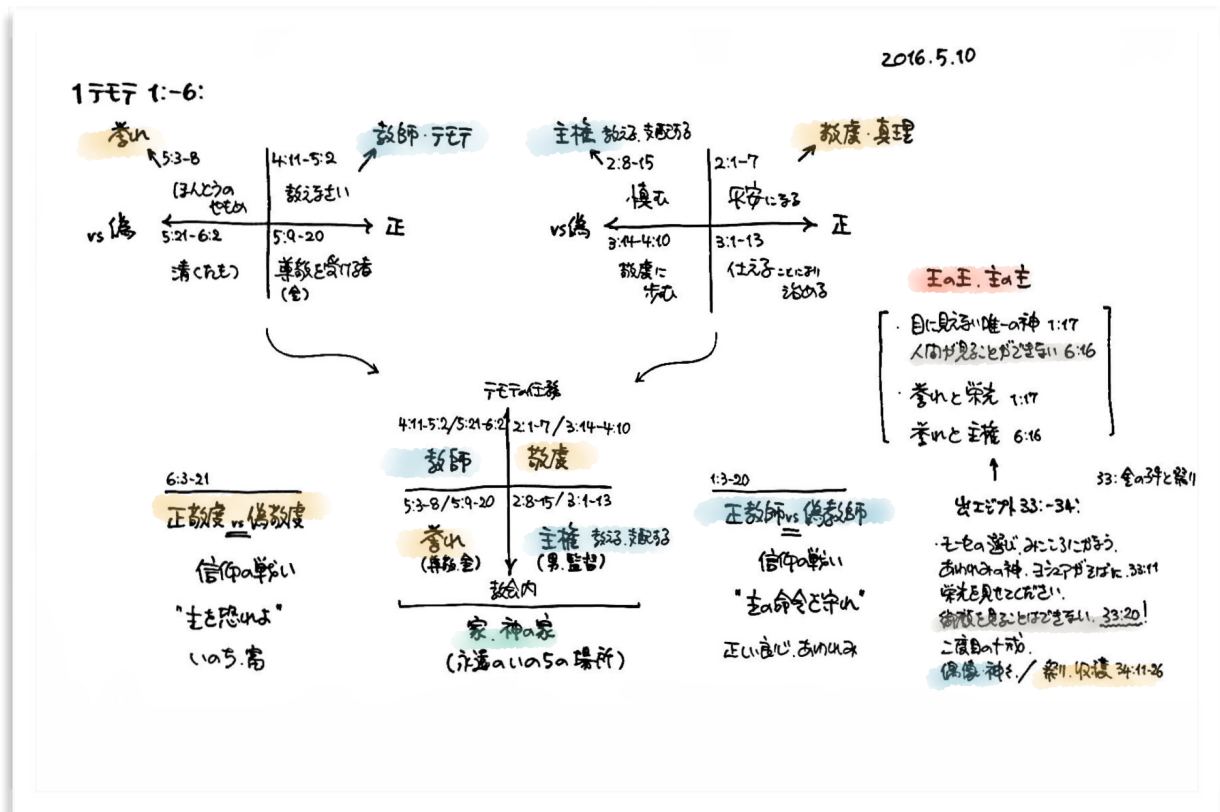




テモテへの手紙第1 1-6章

テモテへの手紙第1



テモテへの手紙第1の分析をやってきました。分けるのに分けやすい感じがするのですよね。監督はこうです、執事はこうです、やもめはこうです…ということだったのですが、全体を見るのに、またまた、いつものように苦労しました。苦労しましたが、たくさんの方を教えていただきました。

特に、今回の収穫の第一のものは、祈りです。祈りが全体を支えている。もしくは、全体に行き渡っているものだろうということで、研究をはじめたところ、このテモテの手紙の祈りは何だろうという「王の王、主の主、誉れと栄えは神のもの、アーメン」というのが、1章17節と、6章15節から16節のところにあります。この「王の王、主の主」という観点でテモテの手紙を見ると、それ無しに「教会はどう運営したら良いでしょうね」みたいなことを見るのとは、大きな神の家についての見方が違うということがわかると思います。

信仰の戦いを戦っているというテモテ。パウロからテモテへということですが、パウロがモーセのような人物、テモテがヨシヤのような人物ということで、その並行も以前見ました。全体は、最初と最後と真ん中が、おもむきが違っている。真ん中が、何か具体的な感じがして、最初のほうは、もうちょっと律法とか、正しさ、敬虔というもう少し抽象的な感じがするものだと思います。

1章の最初のところは、信仰の戦いなのですが、偽りの教師と戦っている。その信仰の戦い。6章のほうは、敬虔、主を恐れる。偽りの敬虔と戦っているというのが、

最初(1:3-20)と最後(6:3-21)です。「正しい教師」対「偽教師」(1:3-20)。「正しい敬虔」対「偽敬虔」(6:3-21)。これが信仰の戦いの2つの側面ということです。

主の命令を守れ(1:3-20)、主を恐れなさい(6:3-21)という戦いを戦っている。約束の地に入っていき新しい神の家を作り上げる、永遠のいのちの祝福の場所として、神の家を建て上げるということが、テモテに与えられた任務になっています(真ん中)。その神の家を建て上げるというときに、信仰の戦いですから、偽教師を追い出す。それで、欲望、この世の富に騙されないというようなところが、戦いとなっています。

真ん中の2章、3章と、4章からのところが、4つずつに分かれているのだろうということで、(上の図の)こちら側(右)とこちら側(左)に分かれています。こっちとこっち(右と左)に分かれていますのですけど、真ん中もクロスしています。

基本は、教えること(1:3-20)と敬虔であること(6:3-21)、正しい良心(1:3-20)といのちの祝福(6:3-21)。この2つが具体的な教会の中での働きということと、テモテが与えられている任務というものも両面あるというように、構成されているというふうに考えています。

4つの段落が2つずつペアになっていますけれど、それが、ここに取り出されています。この2つ(2章,3章)がここ(上の図の右)。この2つ(4章から)がここ(上の図の左)に説明されているというものです。

例えば、最初2:1からと3:14から。ここは、キーワードに敬虔、真理。2:8からの段落と、3:1からの段落は、教える、教えられる、上に立つものと仕える、慎む、慎んで、支配を受けるという支配関係について話しています。

後半の4:11からのところは、今度は、テモテは正しく教えなさいということと、悪い教えに騙されないで、悪い教えから清く保ちなさいということ。それと(5:3-8)、やもめの話は、ほんとうのやもめ、誉れ、お金を受ける話なのですね。ほんとうのやもめは、誰なのか。やもめを正しく取り扱うことは、敬虔ということなのですね。主を恐れてその働きをちゃんとこなさなさい。それと(5:9-20)、尊敬を受ける、献金を受ける対象は誰なのか。ほんとうのやもめは誰ですか、二重の尊敬を受ける長老は誰ですかというようなことで、誉れのことと(5:3-8/5:9-20)、教えること(4:11-5:2/5:21-6:2)。教える側(2:8-15/3:1-13)と敬虔に歩む、主の真理のうちを歩む(2:1-7/3:14-4:10)ということが、クロスしている感じです。片方(2:1-7/3:1-13)は正しいほう。片方(2:8-15/3:14-4:10)は偽りと戦うほう。肯定的なのと相手に対してどうするか。教えなさいというほうと(4:11-5:2/5:9-20)、偽りに騙されない(5:3-8/5:21-6:2)という、正しいのと偽りと言っているのが、この並行です。

その教師と敬虔、教えることと敬虔のところが、「主権」と「誉れ」と書いてあります。主権と誉れと書いてあるのは、最初の祈りのところです。祈りの中に、「目に見えない唯一の神、人間が見えることのできない神様です。その神様に誉れと栄光、誉れと主権」と言っていますから、神様のしもべとして、誉れと主権を正しくあらわすことが、テモテが命じられて、教会が行わないといけないということで、この教える側、支配する側の話は、主の支配を覚えて主が成してくれるように支配するということと、主に尊敬を払うように、従うように、この世で尊敬すべき者を尊敬するということが、祈りと共通しているところです。

この誉れと栄え、栄光が主にあるように、「王の王、主の主」という言い方の祈りなのですが、目に見えない唯一の神とは何なんだろうということで、出エジプト記33章、34章。金の子牛と祭りをしているという偶像の神々に仕えて偽りの祭り、主を恐れな

この世の富に溺れている、欲に騙されているということをやった後に、もう一度モーセが選ばれた。モーセが神様に選ばれて「御心にかなうということは、どうやったらわかるのですか」ということを神様に頼む箇所ですね。その時に33章11節で「主は人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。モーセが宿営に帰ると彼の従者でヌンの子ヨシュアという若者が幕屋を離れないでいた。」という一文があるのですが、栄光があらわされる時に、パウロがテモテに命じたように、その時モーセのところに、ヨシュアがいると。それで、私が御心にかなうのがわかるのは、どうしたら良いですかと言ったときに、モーセがもう一度言うのですね。「どうか、あなたの栄光を見せてください。」というふうに言うと、主の名で宣言をします。「あわれもうと思う者をあわれむ。」このあわれみの神というところは、1章12節から17節のところに、パウロは「私は神様からあわれみを受けた」ということを強調しています。そのあわれもうと思う者をあわれむと言われた後に、「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見てなお生きていることはできないからである。あなたはわたしの後ろを見るであろうが、わたしの顔を決して見ることはできない。」と言っているところを思い出すような言い方が「目に見えない唯一の神」「人が見ることができない」と言われているところかなと連想したら、クロスリファレンスにも、テモテ第1の6:16ですよということが書いてあるということでした。

そして、2度目の十戒を与えられて、もう一度命令を要約されている感じですが、そこで言われているのが、偶像の神々に仕えるな、騙されるな、惑わされるなということと、偽りの祭りではなくて、正しい祭りの話、収穫の話もここに出ています。

ということで、信仰の教師たち、誰に従うのか、何を喜んで受けるのかということは、ここでも言われている2つのことです。それが、「王の王、主の主」であるという私たちの主、あわれみ深い主が、神の家を建て上げてくださる。信仰の戦いを戦って、新しい約束の地、ここでカナンの国々と戦ったように、偽りの教師、偽りの敬虔と戦って勝利を収めてくださいと言われているのが、第1テモテということだと思います。